慈光

第二十四巻　第一号

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十七年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二七二号）

目次

懺悔録（五）―王舎城の悲劇……近角常観……(1)
法話集……菅瀬芳英……(7)
水の味……高原憲……(12)
念仏詩抄……木村無相……(17)
衆禍波転……花田正夫……(20)

懺悔録（五）

近角常観

第六章　阿闍世王の懺悔

彼の阿闍世太子は、国王となりてあくまで五欲のたのしみをほしいままにしようと思う心より、父を殺して王位にのぼった。然しのちに至って、心に深い後悔をなし、胸中しきりに熱し悩んで、全身に悪瘡（あくそう）を生じ、臭気はなはだしくて近づくことが出来ぬ。

王自らおもえらく、かくの如くに悪事のむくいがてきめんであるから、唯今にも地獄に堕ちるであろうと、大いに苦しむに至った。父を殺す程の者なれど、さすがにビンバシャラ王の子であるから、父のお蔭で自然と仏陀のお手廻わしで、かかる心が起ったのであろう。いよいよ目が醒めてみるとたまらない、夜となく昼となく苦しむ。

母の韋提希夫人は、見かねて色々と薬をつけてやるに、薬を塗れば塗るほど、いよいよその痛みが増すばかりで、少しも効がない。それで阿闍世王が母上に申すには「これは私の心から起った病気であります。肉体だけの尋常の病気とは違います。それ故とても人間の手ではなおるものではありますまい」と如何にも失望悲哀の頂点である。

かく身も心も悩乱して、現在未来の苦痛煩悶が、一時に大山の崩れる如くにせまり来るところへ、六人の臣下がかわるがわる伺候した。この六人は印度の六派の哲学を奉ずるものである。それらの人達が如何なることを申しあげたかというに、

先ず第一が日月称と云う人である。この人が王の御前へ出て云うよう。「大王、何故そのようにしおれてましますか。ご身体のお痛みでありますか、お心のお痛みでありますか」大王答えて云うよう「余は今身心共に痛ますには居られぬ。我父何の罪もなきに、無法にも逆害を加え奉ったことは、実に申訳がない。余は智者より此の如きことを聞いている。世の中に五人のものあって、この者は地獄をのがれることが出来ぬ。それは五逆の罪人であるということである。余は今天地も容れぬ大罪を犯した。如何にして身心共に痛まざる得んや。如何なる名医といえども、この苦しみを治してくれるものはあるまい」と云われた。

この時、日月称の申し上げるよう。「大王、何もそのようにご心配遊ばさるるには及びますまい。くよくよとそのようなことをご心配遊ばすから、いよいよ心配になるのであります。そのようなご心配は決してなさらぬがよろしい眠れば眠る程、どれだけでも眠たいようなものであります。酒を飲みつけると、いよいよ飲みたいようなものであります。大王は五逆罪を造りたるものは、地獄に堕つるとの仰せでありますが、誰が実地に往って見てきて、そう申したのでありますか。世の中には随分利発者がありまして、大王の今の仰せの如く地獄があるなどと、見て来たかの如く説くのであります。また大王は、世間に大王のご病気を癒やすものがないと仰せられましたが、如何にも無いでありましょう。外には決してありますまいが、此処に至極の名医フランナと申す人がおいでであります。この人は、一切何事も知らぬこととてはなく、その徳行も、実に一点の汚れのない方で、常に一切を人々のために、無上の教を説いて居られます。

この人の説には、善と云い悪と云う云う如きことはあるものではない。故に善悪の応報などがあろう筈がない。従って人の行為にも、勝れた行、劣った行という如き区別を立てるものでない。一切のことは皆空無であると、かように教えられまする。この人は唯今、この王舎域の市中に住して居りまする。願わくば大王、ともかくもお出かけ遊ばして此人に治療をお命じなさるようにと。そこで大王が「実に汝の言の如く、余が罪を滅ぼしくるるならば、余も深く帰依するであろう」というて、ご挨拶をなされた。

この日月称大臣の云うところはどうであるか。心配するから益々心配になるのである。そんな心配をせずにおけというのであるが、かく忠告したとて、何の効があろうか。深くわが心に悪しきことを知って、心配で〳〵ならぬ時にかくの如きことを云えばとて、少しも慰めにはならぬ。心配せずに置かれるものならば、誰が好んで心配をなすべきや。心配せずに居ようと思うても、心配せずには居られぬ故、心配するのである。これを察せずに、心配せずに置けというは、何たる情の無い言葉であるか。けれども世にはこの如き慰め方をするものが随分あるものです。さてこの日月称というは、空見外道とて、過去世もなく、未来世も無し、唯いのちのある間こそ生きて居ると云うのであるけれども、死ぬれば大風に灰を撒いたようなもので、二度と生れて来るものでないと、こういう説をもって居るのだから、自然に前のようなことを云うて慰めようとしたのである。今日とても、此種の意見を有して宗教に対する者が少なくない。一時評判の高かったかの中江兆民居士の「無神無霊魂論」もこれに似ている。又これの反対で黒岩氏の

「天人論」これも一時は餘程評判のもので あったが、これの方はある意味において靈魂の存在を主張する。併したとい靈魂があると道理の上できめたからとて、実際安心の出来るものでもない。又靈魂が無いと云うたからとて、罪悪の感じが深くなって、苦痛に陥りて居るものを慰め得るものでもない。つまり学問や理屈でどう押しつけて見たところが、それで生老病死憂悲苦悩を抱いている人間に満足を与えられるものでもない。真の安立は実験の宗教より外に達し得らるる道はない。

次にまた一人の臣下蔵徳というがお伺い致して、申上げるようは、「大王、何でその様におやつれ遊ばすか。お唇もおかわきの様子、音声も細って聞えます。御身体がお悪いのですか、ご心配がおありなのでございますか」と。王が仰せられるには「こちらはどうして身心共に痛まずに居られようぞ。自分が愚かで人の見分けがつかぬから、つい多くの悪人共と近づきになって、父の王をうとましくなりとうとうダイバタッタと云う悪者の云うままになって、政道正しき父の王を失ない奉ったのであるもの。余は前から聞いて居った、父母及び仏弟子に対して、善からぬ心を以て当るならば、その報いで無間地獄におちるということである。たった今おちるのだ、起っても坐っても居られぬ、助けてくれるものはない、ああ悲しいことである」と。

大臣がそこで申上げるには、「大王、あなたはしばらくお気をしっかりとお持ち下さい。凡そ道には二通りありまして、一つには出家の道、二つには王道であります。王者の法で申すならば、其父を殺して代って国王となることはさしつかえがありませぬ。それは逆と云うて云われぬではなけれども、決して罪にはなりませぬ。譬えばカラカ虫という虫は、その生れるときに必ず母の腹を嚙み破って生れ出るようなもので、それがその虫の生れる法であります。それらのものの法とあれば、たとえ母の身を破っても罪とは申されませぬ。そういう理屈で王者の法では、王位を得るには、これを殺さなければ取って代ることが出来ぬとして見れば、王位を取るために、たとい父や兄を殺しても、それが王者の法というべく何とて罪となりましょう、もつとも出家ならば蚊一疋、蟻一つ殺しても皆罪になるのであります。こういう訳でありますから、どうかそのように御苦慮遊ばさずともよろしゆうございましょう。なるほど仰せの通り、よい塩梅にご治療申し上ぐる者はないでございましょう。併し、大師マカリクシヤリシと申す方がおいで遊します。一切の智慧をそなえて居られて、一切の人を憐れむことあだかも赤子を母があつかうようにしてくれます。唯今このかたはこの王舎城中に住居つておいでであります。

す。どうか大王、かしこへお出向き下されば大慶至極に存じ奉ります。お面会になればきっと一切の罪が消えて御心が安まります」と。大王の御返事は前の通り「真にそうであるならば帰依を致そう」と。

その次に又一人の臣下が参った。その名は実徳というてこれもまた大王のおそばへ出て申上ぐるようは「大王にはどうしてそのようにお首髪（ぐし）もよもぎの花の飛ぶが如くに取り乱してあられますか。御病気であるか、ご心配がおありですか」大王のご返事に「わが父の王は慈悲深い方で、この身を深く愛して下さった。実に父の王には少しのお悪いこともなかった。わが身がまだ胎内にあるときに占い師が申上げるには、この御児さまはおうまれになっても大王には仇敵であります。大王の御生命をうばい奉るは必定です、生かしておおき遊ばしても御為めにはなりませぬと云った。そういうことをお聞きなされて、なお取り上げておそばを離さずに御養育下さったのである。前から自分は、五逆罪のものは阿鼻大獄に堕在すると聞いていた。しかるに自分は大恩ある父王を殺したからは、どうして怖ろしく思わずに居られよう」そこで大臣は「一切衆生がみな過去の昔より持ち来れる種子によって、この世へ生れ来って、種々の運命が分れて居るのである。前王は盛徳にましまして、少しの罪もなかったとの仰せはいかにもごもっともであります。しかれども其罪なしというのは、川の水のすくなきを、水無しと云い、塩梅の足らぬを、塩気なしという如き例で、前王は、この世においての罪はなくとも、前生の罪の種子が残りてあったから、かの如き最後を遂げたまいたので、要するに、前王は自分の罪の餘報によって、お果てなされたのであります。しかる以上は大王、何もあなたの罪ではありませぬ。それ故そのようにいつまでもご心配遊ばさずに、何卒気を大きく持っていられますように、お願い申すことであります。しかし私の申すところではご安心もなりますまいから、どうかこの王舎城中に住む、サンジャヤビラセンシと云う大徳についておたずね遊ばすように、お願い申します」と。

そこへまた悉知義というものがまかり出て、お見舞を申上げたところ、大王は「この通り苦しんでいるのは知ての通り大逆罪を犯したからである。アー自分は今すぐに阿鼻大地獄におちて無量永劫大苦悩を受けねばならぬ。誰もたすけてくれるものはない、悲しいおそろしい」と。この叫びを聞いて悉知義は「マアどうか大王、しばらく御気をシッカと持って給わらば如何ばかり嬉しく存じます。大王には御承知にございませぬが、昔は国王ラマと申す方がその

父王を殺して自ら王位をおつぎになりましたことを。その外バッダイ王、ビルシン王、ナゴシヤ王、カテイカ王、ビシャユ王、月光明王、日光明王、愛王、持多人王、これらの王様方は、みなその父を殺害して玉位に登られました。

それでもお一人として地獄へ入られた方はありませぬ。又現在でもビルリ王、ラダナ王、悪性王、鼠王、蓮華王、いずれも誰一人として、その王様方の中で、親を殺したことを気にしてお苦しみの方はございますまい。地獄だの、餓鬼道だの或は天上世界だの、そのような所を誰れ一人見たものはありますまい。大王よ、唯二つの境界があるばかりであります。一には人間界、二には畜生界。それらとても何も善悪の所作の因縁によりて、境界が別れたのではありませぬ。烏は染めざるに黒く、鷺は洒（さ）らさざるに白しで、何れも唯天然であります、自然であります。善もなく悪もなく又善悪の報いもありませぬ。して見ますれば大王、御安心下さるよう、御心配を遊ばすと際限がございませぬ。そうしてどうか、かような道理をば、かの有名なるアギタシキンキンバラと申す人にお尋ね下さらば、委細明了に申上げ必ず大王の御心を安んじ奉ることでござりましょう」と。

第五番目に吉徳という大臣が御伺候いたして「大王には地獄におちるとの仰せでござるから私は唯今、地獄という言葉の詮議（せんぎ）を致しましょう。つらつら地獄という字を考えまするに、地というはこの足で踏む大地のことでござる。獄という字は破るという義がございますから親を殺すものは地獄におつるというも、すでに地獄という言葉が地獄が破れてしまうということになるでありましょう。それならば罪も報いもありますまい。又地という文字には人間という訓があり、獄という字には天という訓があります、してみると、父を殺すと人間もしくは天上界に生れるということにでもなりましょうか。道理こそあれ、バソ仙人の説には、羊を殺すと人間もしくば天上界のたのしみを受ける、そのことを地獄というと申しております。又地の字には命という訓があり、獄の字には長いという訓がござる。して見るとこのとは、人を殺すと自分が長命するということでありましょう。かように文字の訓義をしらべて見ますと、どうしても恐ろしい地獄世界などと名つけるケチな場所はないのでありましょう。譬えて見ると丁度あの麦を植えると麦が生え、稲を蒔くと稲が取れるようなもので、人を殺しますとかえって人に生れましようが、人を殺したからとて地獄へおちるなどの心配はいらぬことであります。大王先ず私の説をお聞き下さい。実は殺すの殺されるのということは決してないわけであります。なぜならばもし仮りに人間に魂があるとしても、人殺しは罪になりませぬ。魂が実にあるものなれば、それは死なぬものでありましょう。死なぬものならば殺そうとしても殺しようがないではありませぬか。どこに罪と云わるべきわけがありますか。又魂が無いならば草木や石瓦の如きものであるから、なおもって殺したくても殺すべきものが無いではありませぬか。どうして罪となりましょう。いずれから考えても人殺しが罪となるという道理は立たないことであります。譬えば火が木を焼いたからとて火には何の罪もない斧が木を切りましても、斧に罪があるとは申されませぬ。刀で人を殺しても同じ道理で、刀に魂があるでもないから刀に罪がある筈もない。一切万物皆この通りで、殺すも殺されるものもない。どうか大王ご心配をおやめ下さるように願います。物を気にしては果てしがありませぬ、唯心配がつのるばかりであります。こういう道理を説きあかす智者はカラクダカセンネンと云う人であります。何卒あの人について早くご安心遊ばすように」と。

第六番目に、無所畏（むしよい）と云う人が出て、これも自分の意見をのべて、例の通り矢張り自分の師とするところのニケンダニヤケンと云う人を推挙いたしました。かように六人の臣下が御前に出て、各自の意見を述べてお慰め申上げたが、大王は一向に安心の様子がなかった。

× × × × × ×

（注）九十五種世をけがす　唯仏一道きよくます

菩提に出到してのみぞ火宅の利益は自然なる

古代印度に仏法以外に六種の師があった。その弟子に十五づつあって、師弟合計九十六種あるが、その内一種は小乗仏教と同じことを説くのでそれを除いて九十五種の説とされた。六人の師は、近角先生が詳しくお述べ下さった通りで、これでは世間を迷わし汚すばかりで、真の解決の光は射さない。そこに唯仏一道のみ清くましまして、この弥陀の悲願を信じ仏果を得れば、三毒五欲の煩悩に焼かれている火宅に住む衆生を、仏力自然のおはからいをうけていかなる業苦に沈める者をもたすけとげることが出来る、とのこころである。次号で、仏弟子であり名医であり、大臣である耆婆大臣の慰問をうけて、アジヤセ王も仏所に詣でて、心ひらけ、随喜讃仰の身と転じる有様をお述べ下さるので、心してお読み頂きたいものであります。（花田註記）

法話集

菅瀬芳英

歳首の感

「御一代聞書」に曰く、

勧修寺村の道徳、明応二年正月一日に御前へまいりたるに、蓮如上人仰せられ候。「道徳いくつになるぞ、道徳念仏申さるべし。自力の念仏というは、念仏おおく申して仏にまいらせ、この申したる功徳にて仏のたすけたまわんずるようにおもうて称うるなり。他力というは、弥陀たのむ一念のおこるとき、やがておん助けにあずかるなり。そのち念仏を申すは、御たすけありたるありがたさ〳〵と思うこころをよろこびて、南無阿弥陀仏に自力を加えざるこころなり。されば他力とは他の力というこころなり。この一念臨終までとおりて往生するなり、と仰せそうろなり

道徳という人が蓮如上人の所へ年頭の挨拶に参上したところが、上人は年頭の言葉には、何も答えたまわず、直に「道徳は今年いくつになるか、道徳、念仏を申せよ」と勧められたのである。これがありがたいのである。一切の世辞を語る餘裕がないのである。直ぐさま未来往生の一大事を急がしめられたのである。

かかる有難い御言葉の次に、他力念仏とを区別して、油断して自力の念仏とならぬように、他力の念仏であれと、正月において特に他力念仏の肝要を説かれたのである。

さてお互は、さあ正月が来た、やあ元旦だという風に浮き立っているが、ずるずるべったりしていると月日に逃げられる。月日に逃げられた我々は責任は我にある。換言すれば月日の過ぎる。過ぎるにつれて我の責任が増してくる。油断は出来ない。それ故に上人は、油断をするな〳〵、念仏を申せよと餘裕のない御教化を与えられたのである。我々は月日の過ぎることに対して油断が出来ぬとすれば、月日の集りであるべき未来に対してもその用意を怠ってはならぬ。落ちつく先の未来の一大事はまことに油断が出来ない。社会に対し、まだまだ自己の責任を果たさぬことを深く懺悔し、二倍にも、三倍にも努力して仏恩を報謝せねばならぬ。

お呼声を便りに

近頃の者はどうも信心を得てから、その結果として有難い心持を望んでやまない。信心の上は必ずわが心に或る感情を得たいとする。それは自分が造ろうとするのであるから永続性がない。当流はそうではない、あなたのお呼声をたよりにするのである。

善導大師の二河白道の喩でいうと、右と左とに水火二河があり、その中央に四五寸の白道があって、両側の水火が互にこの白道を或は焼き、或はうるおしている。ここに思いがけなく、如来の「汝一心正念にして直に来れ」という仰せが耳にとまる。先にはどうしようかと迷っていた者がこのお呼声のために何もかも忘れた。これを聞いた行者の眼前には、水火もなく白道もない、唯如来の、そのまま来いのお呼声があるだけである。

それ故に、当流では「聞」を第一とする。聞其名号、唯信仏語、とはこれである。かくの如く如来の勅命を便りとするのであるから、このお呼声の外に別に我から有難い心持を得たいと思うに及ばぬのである。有難い、有難くないなどの感じのために如来の慈悲に変りがあるのではない。只如来は、迷っている私達を捨ておけずして、大悲をおこしたもうたのである。行者の感じは一時的で、如来の勅命は永久的である。

事実を事実と知る

「論註」には「如来とは法相の如く知るが故に」との言葉がある。この意味は、如来とは如実に世間を識知したまえる方に名づけるというのである。如来は実に境の事相をありのままに体得せられた方で、事実を事実と知りたもうた方である。たとえば現実の世界は無常である、無常であるのが事実である。この無常である事実のままを悟られた方を如来と名づけるのである。

それ故に、定義を反対に考えると、凡夫とは何と云うのであるかと云えば、凡夫とは事実を事実と知らぬ者のことであると云えよう。無常の世界を常住であると錯覚しているのである。つまり仏と凡夫との区別は、事実の通り見るか、事実に背いて見るかの差に帰すというてよい。摂取不捨の真言を事実であると思わぬから出離の縁がない。如来の仰せを事実とし、事実のままに聞いたのが聞であり、そのままが信である。

迷悟は照らされて知る

迷いの世界にいる者は「我は迷いである」と、どうして知ることが出来ようか。いわんや自分の住んでいる境界を迷いであると名づけることが出来ようか。迷いの名は、先覚者から「お前は実際、迷界にあるぞ、まことにあぶないことである」と、教えていただいた後、はじめて「我は迷

いの衆生である」と了解出来るのである。「我が迷うている」と知れた時は、悟りの境界を求めずにはいられない。

こちらがさほど本気でないのに、先方が本気になっているときは、先方の本気に照らされて、こちらも本気になる例がある。また社交上で、自分が案外彼をいやしめていても、時に触れて彼のなすことや言うことに自分の頭が下がる事がある。「聖教よみの仏法を申したてたることはなく候。尼入道のたぐいのとうとやありがたやと申され候をききては人が信をとる」と仰せられたのもこのいわれである。そこで、こちらが彼に頭を下げることを餘義なくさせられたことは、先方の偉大さに照らされたによるので、照らされて始めて自分の方が卑劣だと知らされるのである。自分が卑劣だということは元来自分だけで知れるものでない。先方の威厳ある態度と確固たる言葉に照らされてはじめて自分が誤っていたとわかる。

宗教的罪悪もまたこの通りである。「松影の暗きも月の光かな」浮かぶ瀬のない者であるということは、仏が法界の真如をさとられ、その智慧に照らされて、仏の方から「お前は現に罪悪生死の凡夫である」と聞かされて、始めてそうでしたかと気がついて、それによって真面目に自己をかえりみるにいたったのである。井戸の中の蛙は、自分がいまどこに居るのか、井戸と天地とはどちらが広いのか知らない。「お前は狭い所、窮屈なところに居るのだ」と知らしていただくのは先覚者のたまものである。

功徳成就の浄土

「論註」に、何々功徳成就といわれているが、私は曇鸞大師のあの御言葉が大変ありがたいと思う。未成就や、成就最中のものならば、浄土行きのご案内を受けてもはばかりがあろうが、成就しての上であるから、何はさておきこのままでよいのである。「私は浄土のあらゆる功徳をすでに成就したから、汝等はすぐ来ておくれ」との勅命である。「論註」の著者は余程ご辛苦の結果、ああいう大作を書かれたものと見える。よくもああまで詳しく観察して下されたことかなと、常に驚く次第である。

すべては如来清浄の願心から、この「功徳成就の浄土」が建立されたのである。虚偽の心から建立されたのではない。皆かくの如きいたずら者を生れさせようとの、清浄真実の大慈悲からつくられた浄土であるから、ことごとく真実で、ことごとく安心出来るのである。この仏の方に成就されたことを認めることが衆生の役である。信心とは言葉を換えると、仏の方に成就されたものを衆生が聞いて認めることである。

沙弥教信

近頃の僧侶は、どうも人を教化しようと思って布教している。これでは「聖教よみの仏法を申し立てたることなし」というお言葉の通りになる。布教者は第一に自己は何者であるかを省みねばならぬ。我は布教する者であると思って布教すると、人が信をおこさぬ。それ故に先師も「尼入道の尊やありがたやと申すを聞きて人は信を取るなり」といわれている。

この点からいえば、かの沙弥教信などは実に理想的の僧分とあがめられるべき人である。教信は「外に賢善精進の相を現ずる」ことを恐れて、牛追いをしながら念仏を唱えて、播州賀古の宿に着いた。教信は人から名聞を求めていると見られることを大層きらったのである。それで彼は他人の荷物を運んで、その駄賃をもらって生活し、身にボロをまとうて、あるかなきかの如くに一生を過した。

教信は、人を教化しよう、信仰を得させようという観念が毛頭なかったのであった。ただひとすじに念仏を唱えながら、未来の往生一定をよろこんでいるのみであった。教信の眼中、位勲なく財宝なく、常に赤貧洗うが如き中に、深く燃ゆる信念を抱いていたことは、現今の宗教家が大いに学ぶべきところであろう。

煩悩熾盛

煩悩というものは炬燵のようなものである。随増といって次第々々に習気（じつけ）が増すものである。法華玄義の中に「人生の快楽は瘡（かさ）のようなもので、そのあとが痛む」とある。煩悩をいとうということは夏の日に焼けつく石に腰をかけて、ハッと驚くようであるべきである。焼けついた石には誰も二度と腰をかけるものがない。これが道理である、けれども凡夫の悲しさには、心に任せずして煩悩を起すのである。それ故に、念々弥名常懺悔である。

かって京都の学林の生徒が、知恩院内に庵居していた義山師を訪ねてお話を聞きに行ったことがある。話が続いて中食頃となった。けれども生徒に馳走するお膳がなかった先ず無い物はないとして中食の支度を役僧に命じた。ところが役僧が少しばかり手違いをした。そこで義山師は思わず、役僧を打擲（ちょうちやく）してしまった。

やゝ経って、師は深く悔い、そしていうには「ああ無始以来の薫習で！無始以来の薫習で！」と泣かれたのである。

ここで、凡夫の悲しさはわが思う通りにならぬのである。我々は目を覚ますことが出来ない。これを覚まして下さるのが如来である。仏を覚者と訳するのもこの意義である。われが悪人と気づき、目がさめた時は、すでに如来が我々を助け、御恩の中にまるめて下さった時である。

ともしび

聚墨生

人の悪しきことはよくよく見ゆるなり。我身の悪しきことはおぼえざるものなり

（御一代聞書）

鏡の前に雀がくると、そこに映る自分の影を敵と見てはげしく攻撃する。又水中に鏡を入れると鮎は縄張りをおかす者と見て自分の影をしきりに攻め続けるという。

さて我々は他人の顔の汚れはよく見えるが自分の顔のそれは見えない。ただ正しい教えの鏡に映す外に知るすべもないが、うぬぼれの強い我々は、その教にうつる自分の姿を雀や鮎と同様に拒否して受けつけない。

「煩悩具足の凡夫」とは、仏陀がかねてしろしめす我等の姿であり、親鸞聖人は「煩悩具足の我等はいずれの行にても生死を離るることあるべからざる」身と信知されて、「他力の悲願はかくのごときの我等がためなりけり」と随喜していられる。又和讃に「煩悩具足と信知して本願力に乗ずれば、即ち穢身をすてはてて法性常楽証せしむ」とある。

仏語をよく聞き、その深重な思召しを信ずるか否かが、われわれ迷悟の分岐点である。

四六・九・一九日

○

聞というのは衆生仏願の生起本末を聞いて疑心なきをいう

（教行信証）

浄瑠璃に、石童丸は父刈萱（かるかや）道心をはるばる九州から高野に尋ねたが、父が名告ってくれないので空しく山を下ったとある。それにつけても、呼べばこたえ下さる念仏のたのもしさを思う。

さて念仏申す人もすくなくないが、迷い子が親の名を空しく呼ぶ程度か、群盲の象さぐりで自分勝手な仏様を想像してその幻影を追うて称えている人が多いのではあるまいか、それでは悲しいことである。

我々限りある心で、智慧限りなく、慈悲極みなきみ仏をどうして知ることが出来ようか。我々の智識も経験も及びもつかぬと知らされる時、念仏はこの愚者に呼びかけられる仏様のやるせない名告りと知らされる。

親は子になくってはならぬことのために心身を労してやまぬ。我々が何時までたっても迷いに迷ってひとり立ち出来ぬ者故に、何時々々までも護り抜かんとて無量寿の誓いをおこされ、我々が事毎にやりそこなって業縁次第でどうした間違いをもおこす奴だから限りない智慧の光明で暗い心の闇を破ってやろうとの御誓いを建てられたのである。

先師は「一一の願衆生のため」と常によろこばれて、法灯を高く掲げられている。

四六・一〇・三一日

水の味

医師　高原憲

人生暦

「今度はきっぱりと病状を打ち明けてもらいたい」

という前注文で往診を求められた泉青は、自動車を駆って村に病臥している彼を訪れました。

七、八年前のことでした。彼は突然大喀血をしました。一年足らずの静養で回復した彼は、全治してしまったと思い込んだのでしょう。再び仕事について思わず無理をしました。酒を飲む日も重なって来ました。今まで彼の身中に眠っていた虫は、不養生でまたも目を覚まして勢いづいて来ました。そして不意打ちに彼を襲いました。不覚をとった彼は一時あわてましたが、間もなく平静にかえって病床につくことになりました。看護婦二人が附添って療養につとめましたが、どうも今度は病勢が衰える様子も見えませんいくらか落着けなくなって来たのでしょうか。泉青から病状を率直に打ち明けてもらおうと決心したのです。

前の療養体験から考えて、今度も七、八ケ月、長くて一ケ年の養生で、又回復出来るものと信じきっているのも無理はありません。しかし思うようにならぬのがこの娑婆の悲しさです。両肺共に相当に犯され、その上、腸まで犯されていることは彼にとっての致命症でした。彼の脈をとりながら泉青は思わずひやりとしました。

致命症を、我身にかかえていようとは露知らぬ療養者は苦痛が迫って来るまでは朗らかなものです。いろいろと闘病術を試みているうちに、やがては全快の島を見つけ出して、幸福の港にたどり着けようと、一日一日の航海をあせっているのです。船底に大きな穴があいているのも船長さんは御存知ないのです。おまけに甲板に羅針盤もないという始末です。

風のまにまに舵をとって、先方に漂うている船のあとを追っています。我が船が漂流している恐ろしさには気づく筈はありません。

「あなたはお幾つですかね」

「三十八才です」

算盤に都合よくとりきめて人生五十とします。一万八千

二百五十日あります。一万八千二百五十枚のカレンダーが出来るわけです。こうなるとどうやら心細いです。三十八才とすればあと十二年の残りです。カレンダーはあと四千三百八十枚残っている計算です。益々心細い話です。だが療養者はこの人生暦の残数を数えようとはいたしません、万年暦をめぐる気持です。何枚かめくったら全快の日をめくり出そう。そのうちには「満願のよき日」をめくる時もあろうと、ただいたずらに人生暦の一枚一枚をもぎ取って行くのです。

この婆婆を去って行った人達の使いのこしの人生暦をそっと調べてみて、おどろくのはこの暦には「幸福の日」がつけ落してあるのです。婆婆の特製暦ですらそうです。並製の人生暦ときたら、めくる日も、めくる日も雨の日です風の日です。めくるまでは次の日を見ることを許されないのが人生暦のおたのしみです。

あと四千三百八十枚の暦、あと何枚めくったら全快日、あと何枚目には幸福の日と、夢を追って今日の一枚をいたずらにもぎ取る人は、今日一日の人生を失っているのです。

病める身の一日拾う命かな

と歌った人がいます。「幸福の日」がつけ落してある人生暦の三枚目か、百枚目か、或いはもっとあとの方でか、きっとめくり出すのは「最後の日」です。四千三百八十枚と予算していても、出来の悪い人生暦の途中できれています。これがわかっていたら一日でも徒らにはもぎ取れません。一日一日を頂かねばなりません。

何もかも我一人のなめなりき

今日一日のいのちたふとし

私の人生暦は、今日一日しかないのです、おそろしいことです。どうしてこの一日をいただこう、この一日の始末によき人の涙があります。ただ法を聞くのだと身命を賭して教えて下さいました。法をきくことによって、ただこの一日が無碍道への第一日目と展開して行くのです。

○

泉青が彼の病床を訪れて三日目の朝、電話のベルがけたたましく鳴るのです。長距離電話だなと直感しました。心の中でひやりと感じました。泉青は電話口に立ちました。

「今朝から腹痛を訴えます。容体が急変したようです。如何がでしょうか」

「それはもう駄目でしょう」

「……」

主治医から容体急変を告げられた彼は、今日一日の暦をあざやかに無碍道への第一歩と展開しました。彼の周囲の人達に残らず会いました。

「これから遠き旅へ出るのだ」

と云って念仏往生の本懐をとげたのです。四千三百八十日残っている筈であった彼の人生暦は、三日目で終りを告げていました。

壽　命

「私の病気が治らないことはよく承知していますが」

こう云って泉青の前に坐った男がいる。年はとって五十六才。頑丈らしい体格ではあるが、どことなく疲れた様子である。顔はややすかばれている。

「治らないことがわかって何故やって来ました?」

「私の寿命を聞きに来ました。今から何年生きられるかそれを聞きに来たのです。先生はなかなかうまくあてるということです。私の友人にも二、三みごとに的中したのがいます」

「うまく当ったら困るでしょう」

「覚悟のまえです。だが出来ることなら今から六年だけは生きたいです」

「六年とはどうした計算ですか。」

「そしたら子供が一人前になるのです。それが不可能ならそれもいたしかたがない」

「はっきり申しましょう。先ず診察した上にいたしましょう」

泉青の町医者生活二十年、この男のように真剣に自分の余命いくばくとつめよったものはない。医者にとっては一番むつかしい問題であり、病人にとっては一番ふれたくない問題である。この予後の問題が町医者の浮沈の鍵である大丈夫という口の下にころりと病人が倒れたら、それこそ一大事である。早速藪医者になってしまう。しかしこれ位難中の難はない。医学が進歩すればする程、この問題の解決が楽になるであろうが医者の多年の経験もなくてはならぬ。

診察しながら泉青は学生時代のことを思い出した。内科の外来で、ある教授がこんなことを話されたことがある。肺結核の患者から予後のことを聞かれて、あと一ケ月位のものであろうと答えてやったら、一ケ月経っても生きている。半年経っても変りがない。一年二年と年月は流れる。とうとう十年間、病人は医者の無能をののしってたおれたということである。教授は予後の判定のむずかしさを懇々と教えられた。今日病人に接するようになって、はじめて泉青はこの味が今更のように味わわれるのである。

この男の病気は彼自ら不治だと言ったが、たしかに不治の萎縮腎である。血圧は二百五十を越えている。尿の蛋白は著明である。心臓の肥大もかなりである。刻一刻と悪化を辿るだけのことである。「はっきり申し上げましょう」

とたった今口を切ったが、あと何年とはっきり宣言されるものではないが大体の見当はつく。

一通り診察がすむと、この男はまた泉青にせまって来る

「あと幾年生きられましょうか」

「あと幾年？とですか。はっきり申し上ぐれば、あなたの寿命は今日一日限りです」

あと幾月したら、あと幾年したらと夢を追うて行くのが私達の生活である。障子一枚先きも見えないこの目にどうして明日が見えようか。明日の幻影を追うものは、今日一日の生活を失っている。先ずいただかねばならぬのは今日一日の豊かな生活である。

最後の目標へ方向を決めて、今日一日を生き抜くものはいつどこで婆婆の名残りがつきようとも、その人の婆婆生活は豊かであり、そのまんま法界の無量寿をうけとるであろう。

「よくわかりました。有難う」

この男はにこやかに泉青の診察室から出て行った。

検温器 (一)

「熱はどうですか」

「熱はございません」

「何度ぐらいです」

「計ってはみません」

「検温器なしにどうして熱がないとわかりました」

「額に手をあてました」

「それでは自分で自分のお尻をかかえてみて、体の重さがおわかりでしょうね。驚きましたね。高熱ならいざ知らず、微熱ときたら気づきません。あなたのは熱がないのではなく、熱の感じがしないのでしょう。生死の分れ路に立ち到るまで熱がないと、すましているのが多いのです。やはり検温器で計らなくては駄目ですよ。文明の利器を存分に使うところに文化の利益があります。そして容易に変化を見出して、無駄を省き生活能率を高めようというのです」

「でも検温器を用いると何だか憂うつになるのです。熱でもあろうものなら心配ですもの」

「ますます驚き入りましたね。敵をうつには先ず敵を知れです。向側にはトーチカが見える。足下には地雷、やあ！これじゃ憂うつ千万、眼をかくし、耳に栓をして勇敢に飛び込もう、これなら恐怖更になしというのがあなたの筆法でしょう。これは盲目滅法です。盲目蛇におじずです。正しく見ることが先ず大切です。恐ろしきことは恐ろしと見るのです。より以上にも、より以下にも見ないのです。円いものは円く見るのです。四角に見てはならないのです。白いものは白く見るのです。決して赤

にも青にも見てはならないのです」

「まさか」

「まさかと思うあなたの眼こそ盲目なのです。盲目ならまだしも始末がよいのです。物をさかさまに見るのです。如実に正見することの出来ないのが私の眼です」

体温器 (二)

ある夜おそく友人から電話がかかって来ました。四十度近く熱が出ているので直ぐに来診たのむというのです。友人とは学校の先生で極めてまじめな若い科学者なのです。泉青は早速かけつけました。これは変です。床の中でうなっているとばかり思っていたら、病人は室のなかで書類の整理をしているのです。まだ独身で下宿住いでした。

「一体どうしたんです？」

「偶然体温を計ってみると三十九度七分あるのです。変だと思って何度計り直しても同じです。いよいよチフスにやられたのじゃないかと思うのです」

一見して平常と少しも変りのない様子です。診察しても何の所見もありません。益々変です。病人が所用に立ったあとでその検温器を取り上げてみると、なる程三十九度七分あります。一度ふり下げて、何の気なしに泉青は指先で水銀球をつまんで見ました。水銀柱はみるみるうちに上昇して三十九度七分です。おや、おれも三十九度七分ある。泉青にはどうにも合点がゆきません。早速鞄の中から自分の検温器を取り出して、泉青は自分の体温を計ってみました。三十七度ありません。

病人が室へ戻ってきました。泉青の検温器で再検しました。三十七度ありません。この科学者が持ち合わせていた検温器が、いつでも三十九度七分まで上昇するというインチキものであったのです。

友人はかねてチフスを一番おそれていました。その弟もチフスでたおれています。床に就こうとして偶然検温すると三十九度七分、それ来たとばかり驚いたのです。とうといやな病にやられた！明日入院、やがて国許から親、兄弟がやってくる。科学者はつい憂うつになって考え込んだのです。ひとつ気にかかることがあります。若い科学者が人知れず書き綴っている日記があるのです。彼女からのレターも机の抽出に秘められていました。飛ぶ鳥はあとを濁さず。これだけは始末しておかないと、落着いて病床につけない。早速に日記をめくり、思い出の頁をひきさき、彼女の文を始末しはじめたのでした。泉青がかけつけたのでインチキ検温器の一幕ものは、めだたく喜劇で終りを告げました。

狂い易いのが私の手製の尺度です。そして都合のよいように伸縮自在です。この手製の尺度に限り、狂いのない標準尺だとうぬぼれて、臆面もなく振りかざしているところに人の世の悲劇と喜劇が展開しています。

念仏詩抄

木村無相

念仏そのまま

〃定散自力の称名は
果遂（かすい）のちかいに
帰してこそ
おしえざれども
自然に
真如（しんにょ）の門に転入する〃

自力の念仏
そのまんま
他力とわかる
ときがくる

自力じや念仏
もうされぬ
信前信後
みな他力

念仏そのまま
純他力
ナムアミダブツ
ナムアミダ

眞夜（まよ）

雪しづる
真夜覚（さ）めて読む
歎異抄

三心釈拝読

我が身のあさましさ
わすれたときは
教行信証
三心釈拝読—

如来のご苦労
わすれたときは

教行信証
三心釈拝読

〃さればそくばくの業を
もちける身にて
ありけるを
たすけんと
おぼしめしたちける
本願の
かたじけなさよ〃

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

無相よ！

ナムと聞いたら
五劫のご思惟を！
アミダと聞いたら
永劫のご修行を！

思うんだよ　無相よ
ナムアミダブツは
如来のご苦労

ご苦労いただく
ナムアミダブツ
ご苦労いただく
ナムアミダブツ

だれか知る

ああ
だれか知る
この不思議—

ああ
われ今日の
日に生くる

ああ
われみ名を
呼び生くる

ああ

だれか知る
この不思議
いのち
雲には雲の
いのちあり

水には水の
いのちあり

石には石の
いのちあり

ああ
天地（あめつち）の
大（おお）いのち
人生こそは
人生こそは
宝の山
ナムアミダブツの
宝の山
人と生れて

宝に遇わず
山にはいつて
宝を得ずば
いかにも惜しい
ことである

ああ
この人生が
ナムアミダブツの
宝の山とは―
いっぱい
天地
いっぱい
ナムアミダブツ

わたし
いっぱい
ナムアミダブツ

四六年三月十日

衆禍の波転ず

花田正夫

教行信の行巻に
「しかれば大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず。即ち無明の闇を破し速に無量光明土に到りて大般涅槃を証し、普賢の徳に遵（したがう）なり、知るべし」
とある。煩悩具足の身としておのれとつくる罪業の重圧に沈みきって浮ぶ瀬のない我等を、どうあってもたすけとげずばおくまいとの弥陀仏の大慈大悲の本願の不思議なお力を信じて、摂取して捨てたまうことのない広大な光明のめぐみを蒙る時、深重な仏恩も仰がれて自然に御名をたたえつつ、一切の業報を身にうけて行くところ、罪障はおのずから功徳と転じ、もろもろの障りがあるまんま障りがさわりとならなくなる。ここにこころくらくさとりすくなく悪おもく障り多き身も大きな燈火をいただいて、浄土への旅を続け、いのちの終るや否や、真実のさとりの身となり、仏の大悲を行じてやまぬ普賢菩薩と同じ徳を得て、思いのままにあらゆる人々をたすけとげる力をめぐまれる、との讃仰である。

池山先生は応接間に、この御文の書かれた近角先生筆の軸をいつも掲げておられたが、晩年に生死も解らぬほどの大病をせられ、幸に恢復に向われた時「即ち無明の闇を破し」までを現生に味うことが出来る。いよいよ病重く死の横顔があらわれる時、行方は真暗闇の闇である。そこへ、ただ念仏が浮かぶそして行方の闇を破って下さる。そのままいのち終れば「速に無量光明土に到りて大般涅槃を証し、普賢の徳にしたがう」のである、と体験のままをお述べになった。

○

さて「衆禍の波転ず」ということが私の心に刻まれたはじめは、少年の頃、寺の信徒総代をしていた祖父に連れられて、壇那寺の花祭にお参りした時であった。御住職に案内せられて、御堂に入り、そこの壁に掲げてあった釈尊の誕生・成道・転法輪・入涅槃の御絵像をおがませて貰ったことがある。その時心に深く刻まれたのが釈尊の成道のお

姿であった。菩提樹下に端坐される仏は円光を放たれている。その四方八方に、成道をさまたげようと悪魔が群がり種々様々な所作をしている。しかし不思議なことには悪魔の投げかける毒矢も利剣も、また火焔などが、一度円光内に入ると、皆転ぜられて、かえって仏を荘厳する妙華となり、宝樹となり、清涼の風と変っていることであった。

その後、誰にきくでもなしに、子供心にもいろいろと考えていたが、結局は、釈尊のすぐれた徳を讃えるための象徴として仏弟子が描いたものであろうとひとりぎめした。然しそのことも何時の間にか忘れてしまっていた。

その後、伯父から歎異抄をすすめられ、六高では池山先生の導きをうけるようになった頃であった。当時すでに胃癌で奥様を亡くしていられた先生から

「家内はかねてから仏法を大切に思い、真宗のすじ道はほぼ心得ていたが、まだ自分の問題とはならなかった。ところがどうも胃の加減がわるいといって売薬などを服用していたが一向に思わしくなく痩せて疲れるので、岡山県病院に出掛けて診て貰った。そこで医師から、すでに病気がすすんでいて手の施しようもないということをそれとなく聞かされた。家内は胃部をおさえて、このかたまりが悪いのですかと聞くと、そうです、とのこと。思いもかけぬ病状をきき、家内は気も動転するばかりであったが、其刹那仏様の大悲はこうした自分のためであったと気づくなり、真暗な心に一縷のあかりがさしてきて、自然に心も平静となり、医師に「よくわかりましたが、子供も五人、実母と養母も居りますので、一日でも長生きして、出来るだけのことをせねばなりませんゆえ、病苦をおさえる薬と、食養などをお教え下さい」と、種々な注意をきいて帰り、体力の続く限りよく働いてくれました。しかし病状は段々悪化し、やがて念仏裡に別れて行きました。

こうしたことがあって〃今生夢のうちのちぎりをしるべとして、来世のさとりのまえのえにしをむすばんとなり。われおくれなば人に導びかれ、われさきだたば人をみちびかん。生々に善友（ぜんう）となりてたがいに仏道を修せん、世々に知識としてともに迷執をたたん〃との唯信鈔の聖語も文字通りに味わせて貰った。その時始めて、衆禍の波転ず、ということを体感した」

とお聞きして、衆禍の波転ずということを実際の体験として教えられたことは私には大きな指針となった。

○

その後、池山先生は甲南高校に転任せられ、私は岡山医大に入った。また父も不如意の中に亡くなり、学資をM家

から出して貰っていたが、大学三年の秋、精神的に行き詰り、どうにもこうにも動きがとれなくなった時、どうあろうとも御一緒して下さる弥陀大悲のましますことを知らされ、生れてはじめて、ありがたさに四方八方を拝まずには居られなくなり、父の墓前に走せて御礼まいりをした。帰る道々、淋しい秋の野辺も、百華咲きにおう春ののどかさをおぼえ、其夜の日誌の一頁に

「過去はすべて感謝であり、現在は法悦、未来は光明である」

と書きいれた。そうした大いなるみほとけの慈懐に抱かれた喜びから、過ぎ去った年をかえりみた時、中学生の頃兄と姉を春と秋に失った時、自分の死を考えはじめたことも、父の死、一家の没落によつて知らされた浮世の風のつめたさも、そしてあらわになる鱗の生えた心等々も、皆そのままに仏のふところにはやく帰れとの警鐘であったと気づかされた。

又、孔子の教も、キリストの教も、ソクラテス等々の西洋の哲人の叫びも皆それによって自己の真相をうつし出す鏡であったと知らされてきた。

このようにして、成道の仏の尊像は、単なる仏徳讃仰の象徴ではなく、我々一人一人が、その仏陀の円光裡におさめられるとき、それは不可思議な真実として、体験されることに気つかされた。

○

その後、京都大学に転学したが、青年期の私の煩悩の熾盛さ、更らに世間知らずの失敗の連続によって、自分には仏法を語る資格など毛頭ない身と知らされ、先ず自分自身の上に、仏法を聞いて聞き抜かねばならぬと教えられた。

更に、三十五歳で肺疾で離職二年、四十六歳の終戦後になって心筋障害による外的活動の停止、数年前から腫瘍、等々と病気続きで、友人から「病上手で死に下手」と評せられるような始末であるが、愚鈍な身にも、肺疾によって、今まで鉄筋コンクリートの様に思っていた身体も、矢張りもろい身と気づかされ、心臓病で自由の旅が出来なくなって、言葉のあることのありがたさに驚き、また老病によって、死も亦我なり、と生と死のどちらもわがこととして受取らされて、御一緒して下さる弥陀仏の御手の頼もしさをいよいよ渇仰させて頂いている。そしてゲエテの名言「死後に光明を見出し得ないならば現在も暗黒である」もなるほどと身にしむようになった。

あまりにも自分のことばかりを書きならべたけれど、これらの一つ一つも、私の身にもつ業報のままに念仏申し〳〵辿らせて頂いているうちに、仏力自然のはたらきで、衆禍が波と転じる妙趣を味い、ありがたい限りとよろ

こばせて頂て居る。

福島先生は「信前も信後も業波はかわらぬけれど、北風の冷たさが、南風のあたたかさに転じてくる」と云われたのも思い合せてよろこばせて貰っている。

歎異抄十六章には「わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば自然のことわりにて柔和忍辱のこころもいでくべし。すべて往生にはかしこき思いを具せずして、ただほれぼれと如来の御恩の深重なること、つねに思い出しまいらすべし。しかれば念仏も申され候、これ自然なり。わがはからわざるを自然とは申すなり、これすなわち他力にてします云々」とある。ここの「わろからん」とは、はじめの「腹を立てあしざまなことをおかし」を受けてあるので「柔和忍辱」と転じるが、これは広く災難とか、道徳ならびに宗教的悪も含まれる。意気消沈した時は元気をとりもどし、愚かさに卑下する時は、その垢を洗われてくるのである。信の生活はこのくりかえしである。

近角先生の晩年、御病気、御長男の戦死、宗教法案の非常時の名のもとに強行実施等々不如意続きの中に、

跡もどり〳〵して辿るらん、甲斐なきことにこころまよいて

のお歌を常に愛唱していられたのも、さわり多い中に、さわりなき仏の無碍光に満たされたお生活であった。

池山先生も障りの多い生活の中にあって、

たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさもあらばあれ

と、本願のたのもしさを仰がれて、念仏無碍の白道を、よきことも悪しきことも業報にさしまかされて信の旅を進まれたのであった。

多聞浄戒（たもんじょうかい）えらばれず
破戒罪業（はかいざいごう）きらわれず
だたよく念ずるひとのみぞ
瓦礫（がれき）も金（こかね）と変じける

無碍光の利益より・威徳広大の信をえて
かならず煩悩のこおりとけ
すなわち菩提のみずとなる

罪障功徳の体となる　氷と水の如くにて
氷多きに水多し　障り多きに徳多し

本願力にあいぬれば　空しくすぐる人ぞなき
功徳の宝海みちみちて　煩悩の濁水へだてなし

法信抄

○

福島政雄

本年は曽我量深師の御逝去が大変に寂しいことでありました。師は私のような者をも認めていて下さいました。また七月には、五高以来六十余年の御法の友、調円理君が亡くなりました。

旧き友みな世を去りて我れひとり老の坂行く寂寥の道
八十路越え老いにし身にもただ念ずすめらみくにの永遠（とわ）の光を

○

あらかわそおべえ

うれしきは
こころと　こころ
まごころと　まごころ
じかに
ふれあいしとき

○

和才誠司

ようやくに八十八坂に辿りつきみ名となえつつ仰ぐ初空

○

禿帚舞天風

○

榊原徳草

弥陀仏に遇いしよろこび若水に

○

法山竜天

老木の傍へに若木根づきけり　（息子結婚）
新婚の晴衣姿や今朝の春
日の暮れも忘れて摘むやつくづくし

○

田中克己

御名一つともしびとしてこと始め

昨年頭に頂いた教ですが、再び新春を迎えました。先般来「障り多きに徳多し」をくり返しお聞きいたしましたが今度気づいて見ると篤信の叔母がこの和讃をいつも喜んでいたのが鮮明に心に刻まれております。

又私の祖母ですが「久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里はすて難く未だ生れざる安養の浄土はこいしからず…」のところに来ますと絶句してうつ伏して了ったものです。これも確かに覚えております。古来から万人に引継がれて行く聖人の不変のみ教を仰ぎ、遠く深い御仏縁を蒙っている身をありがたく思い知らされました。

菱田幸一

あとがき

謹しんで年頭およろこび申上げます。恩師方の御導きと善友方の御念力に支えられて、慈光も二十四巻を迎えました。旅行を制限せられて二十余年、この小冊子が私には本当にありがたいものでありました。芭蕉翁の

いざさらば雪見にころぶところまで

の句を誦しながらペンをとっております。

○

さて池山先生の「信を行く旅人」の著書が、岡崎の杉浦さんと名古屋の鬼頭さんの御支援を得て再版されました。これは、池山先生が甲南高等学校に居られた頃、阪大の学生に歓異抄のお話をせられた時の速記録であります。一章二章三章と、十三章を中心に信味を頒かたれたものであります。しかしこの喜びのうらには杉浦さんの御長男の急死という悲しい因縁が秘められてあります。そして更にその奥に四十年も前に池山先生が岡崎親鸞会に出講下さって、杉浦家で名号を揮毫していられるという深い御仏縁がありますことも、改めて襟を正して思い併せております。

つきましては、御希望の方に実費でお頒ちさせて頂きますから、京都市右京区山田開町浄住寺、榊原徳草様に御申込み下さい。送料共に五百円であります。

○

近角先生の懺悔録は、今回は印度の釈尊当時あった六派哲学とアジヤセ王の関係を詳しくお述べ頂いております。これらは皆泓共が苦悩に沈む時現今でも世間一般にこれに似た慰問をうけるものでありますが、そこには根本の解決の道はひらかれません、アジヤセの苦悶は増すばかりでありました。我々のよきいましめとなることであります。

菅瀬芳英師の法話集は、師の亡くなられた後に出版せられた、語録から頂きました。師の経営せられた同和学園で仏縁を結ばれた方々も多くありました、御一読下さい。

高原憲氏の水の味から数篇頂きました。最近、医道がやかましく世に問われているのでありますが、信の上に歩まれた高原氏の徳光は長く世に伝えられるものであります。

木村さんは、病弱、今日一日、今日一日と大切に念仏していられ、それが自然に湧き出て念仏詩抄となったものであります。

臼杵祖山老師は

さわりなくすべてを照らすみ光はさわりある身の上にこそ照る、と最後の御病床で詠じていられますが、さわり多い身に大きな指針をいただいております。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜午后一時半。南区駈上町二の八八、一道会館、一道会例会。市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目左入ル。

○ 毎月二十四日、午前午后。昭和区小桜町、教西寺法話会。市電、御器所通り下車。市バス北山下車。

定価　半年　四〇〇円（送共）
一年　八〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫　電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光第二十四巻第一号　昭和四十七年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可